

# 保育者・教育者養成における ピアノ学習の実態調査に基づく学習支援の課題

小野 由恵

抄録：保育者・教育者養成校では、従来、教育現場で求められている音楽的資質の向上を目的に、主にピアノを用いた教育がなされている。しかし、養成校におけるピアノ学習は、今なお多くの問題を抱えている。そこで、本研究においては、学生のピアノ実技に関する実態を把握するために、本学のこども発達学科の学生 66 名を対象に、ピアノ学習の実態とピアノ練習に対する意識調査を行った。その結果、学生をつまずきが、練習時間確保や読譜、指使いの工夫の困難などに起因していることが明らかになった。指導者は、学生のピアノに対する不安やつまずきを解きほぐし、ピアノを弾くことを“遊び”の一つと捉えられるように導く必要がある。養成校におけるピアノ実技指導は、ピアノ経験者・初心者に関わらず、技術指導に偏らない、精神的な支えをも含めた学習支援が必要である。

## 1 研究の背景

筆者はこれまで、ピアノの演奏活動と、保育者養成校や高等学校（普通科）、及びピアノのホームレッスンなどにおいて、幼児から大人までピアノやソルフェージュの指導に携わって 23 年を経ている。その多くは一对一の個人レッスン形式で行われ、レッスンの合間のこどもや学生との雑談が、実は互いの信頼関係を深め、その後のレッスン効率をアップさせるのに非常に重要な時間となっていた。その中で、こどもや学生が「音楽が好き」、「ピアノが好き」と目を輝かせて話す姿に、指導者としての喜びを感じる一方で、「学校の音楽は嫌い」と表情を曇らせるこどもたちの存在に心を痛めてきた。学校の音楽に関して寺西は、「私たちは小学校のときから、高校にいたるまで、学校の「音楽」の時間で授業を受けている。しかしたまたま本当に音楽に情熱をもち、本当に自分も音楽するよろこびを知っている先生にめぐりあわない限り、音楽の真のよろこびを学校での授業で味わい知るケースは、ほとんどありえないのではないだろうか。学校で音楽の時間があったことで、本当に音楽が好きになった人が、一体どれほどいるだろうか。<sup>1)</sup>」と述べている。これは、これまで筆者が経験した保育者・教育者<sup>注</sup>養成校においても同様で、果たして音楽の楽しみを知らない学生たちが巣立った時に、音楽の楽しみを次世代のこどもたちに伝えることができるのだろうかという疑問が生じるといえよう。

本来音楽は、人間にとって“遊び”の一つとして存在すべきものと筆者は考える。ホイジンガは、「いっさいの音楽的活動の本質的なあり方は、遊ぶということに尽きて<sup>2)</sup>」おり、「とくに楽器を奏でることに対してこの言葉を用いる<sup>3)</sup>」と述べている。また、柳生は、「音楽するという、本来遊びを深くとりこむことによってしか成立しない教科において、もしも遊びが欠如するならば、それは音楽することの意味と内容を無に等しくする作業といわねばならず、音楽学習をすすめればすすめるだけ、音楽は意味のわからない勉強になりさがり、音楽は好きだが授業は大嫌いという現実がもたらされるのは当然の帰結といえよう。<sup>4)</sup>」と述べている。教育現場において「学校の音楽は嫌い」というこど

もや学生の声を見聞きすることが多く、教育者にとっては悲しい現実である。

音楽教育の現場に携わる者は、保育者・教育者養成の観点から、こどもの教育に欠かすことのできない音楽分野について、どのように学生を導いていけばよいのだろうか。本論文は、保育者・教育者養成を目的とした学習指導において、こどもの教育に欠かすことのできない音楽分野、特にピアノ実技の観点での導きを考察するものである。

## 2 研究の目的

北海道文教大学人間科学部こども発達学科は、保育者・教育者の養成を目指し、2010年度に開設された。2011年現在2学年が在籍し、学生たちは保育士資格、幼稚園教諭免許の他、小学校教諭や特別支援学校教諭免許の取得を目指している。今年度当該学科の学生の音楽に関連する科目構成は、表1のとおりである。

表1 2011年度北海道文教大学人間科学部こども発達学科の音楽関連科目カリキュラム

科目	区分	配当年次	資格区分			
			保育士	幼稚園教諭	小学校教諭	特別支援学校教諭
基礎音楽	講義	1年前期	選択必修			
表現Ⅰ幼児音楽1	演習	1年前期	必修	必修		
表現Ⅰ幼児音楽2	演習	1年後期	選択必修	必修		
保育内容Ⅴ音楽リズム1	演習	2年前期	必修	必修	選択必修	*
保育内容Ⅴ音楽リズム2	演習	2年後期	選択必修	必修	選択必修	*
教科教育法 音楽	講義	2年後期			必修	*

(\*は、小学校教諭を基礎とする場合)

表1の科目のうち、ピアノ実技に直接関わる授業は「表現Ⅰ幼児音楽1」と「表現Ⅰ幼児音楽2」である。常勤1名と非常勤1名により進められており、個人レッスンとグループレッスンが取り入れられている。筆者は2011年度より、2年生の「保育内容Ⅴ音楽リズム1」と「保育内容Ⅴ音楽リズム2」、及び「教科教育法 音楽」を担当しており、いずれもこれまで筆者が多く経験している個人レッスン形式とは異なった授業展開をとっている。教育現場で保育者や教育者が音楽面で求められるものは、ピアノ演奏の能力だけではない。うたうことや手あそび、身体表現などの実践力、更に器楽に関する知識や経験などが必要である。よって2年次の「音楽リズム」においては音楽を多面的に捉え、様々な音楽活動を通して学生が音楽の楽しみを体験することと、1年次に習得したピアノ演奏能力の維持・向上のため、でき得る限りピアノに触れる機会を持つように授業内容を考慮した。しかしながら、今年度前期の「音楽リズム1」を通して見えてきたのは、音楽とピアノ実技に対する学生たちの学習意欲の低さ・苦手意識の強さであった。加えて、学習者と授業者の考える音楽についての認識に大きな隔りがあるという点である。

学習意欲の低さについては、羽根田が「学生のピアノ演奏技術に対する意識は低いのである<sup>5)</sup>」と述べており、学生の意識改革を提案している。また苦手意識については、阪本らの研究で、指導者の「要求に応えられない学生は、弾く事に自信を持つ事が出来ず、苦手意識ばかりが先行」し、「苦手意

識を抱けば結果としてピアノ学習そのものが嫌いになる<sup>6)</sup>」ことを挙げている。松永は「現場教員の中には音楽の指導に対する苦手意識を持つ者が少なくない。<sup>7)</sup>」と、教育現場での問題点についても言及している。更に本間は、「教授者は、あくまでも、音楽することを指向しているが、多くの学生には、それを享受するだけの素地が出来ていない。<sup>8)</sup>」と述べている。本学の「音楽リズム1」を通して筆者が感じた問題点は、本学のみならず、保育者・教育者養成校が抱える大きな問題である。

授業の中で感じる大多数の学生の思考は、阪本らが指摘するように、「指導する側の要求と学生の目的との間に生じるズレ<sup>9)</sup>」があると考えられる。すなわち学生にとって養成校で学ぶのは、現場ですぐに実践できる音楽の教育方法や手法そのものの習得であるため、根底にあるこどもの音楽教育における音楽の意義や基礎知識の習得には興味を示さない。

また、自分たちが実践して楽しいことには前向きで、多少の困難が伴うとすぐに後ろ向きになる傾向も見受けられた。義務教育の9年間を通して楽しみ且つ学んできているはずの音楽であるが、基礎知識の乏しさが著しい上、学習指導要領<sup>10)</sup>の中で謳われている本来の音楽の目的とは違った捉え方が形成されている可能性がある。

実際に教育現場から保育者や教育者に求められる音楽的な知識や技術の能力について、泉谷は「ピアノの技術習得に寄せる現場からの期待は大きいと思われる<sup>11)</sup>」と言及している。しかし、中山は「多くの養成校では、入学試験科目にピアノ実技を課していないため、ピアノ学習未経験の学生が入学している<sup>12)</sup>」のが実情であると指摘している。

また、中地らが述べたように、音楽の「要求される内容の多様性に対する、時間数の不足、指導者数の不足、学生の音楽経験・知識の不均衡等々、音楽技能の持つ特殊性から生ずる困難さ<sup>13)</sup>」など、様々な問題が複雑に絡んでいるのが養成校における音楽教育の現状である。

降矢は、小学校の音楽科は「他の教科と同列に論ずることのできない側面を持っている<sup>14)</sup>」ことを指摘している。こうした現状に配慮しつつ、本学における保育者・教育者を目指す学生の音楽における実態を把握し、学生に対する音楽教育をより充実した内容に発展させるため、学生の音楽に対する意識調査を試みた。本論文では、特に学生の「ピアノ学習の実態」と「ピアノ練習に対する意識」を中心に質問紙を構成し、それらの分析と考察を行った。

### 3 調査

#### 3.1 調査対象および時期

調査対象、及び調査時期については、以下のとおりである。

調査対象	本学人間科学部こども発達学科2年1組、及び2組 回答者62名（「保育内容V音楽リズム1」履修者66名、4名欠席）
調査時期	2011年7月27日（2年1組） 2011年7月21日（2年2組）

#### 3.2 調査方法

記名方式による質問紙調査を実施した。なお、記名方式とした理由は、各学生のピアノ実技に対する習熟度・困難度などを把握するためである。

### 3.3 調査内容

調査内容項目は別紙のとおりである。質問項目は、学生が目指す職種に対する意識（設問(1)～(3)）、ピアノ学習の実態（設問(4)～(13)）、ピアノ練習に対する意識（設問(14)～(18)）の3つに大きく分類した。上述の3分類は、更に以下のように細項目として構成している。

- 1) 学生が目指す職種に対する意識
  - ・ 大学入学前と入学後の、学生の取得希望免許について
  - ・ 希望職種に対するピアノ実技の必要性認識度
  - ・ ピアノ実技を必要と考えた理由
- 2) ピアノ学習の実態
  - ・ 大学入学前のピアノレッスン経験の有無、及び経験年数と学習環境について
  - ・ 1年次のピアノ実技練習の実態
  - ・ 2年次のピアノ実技練習の実態、及び到達度 など
- 3) ピアノ練習に対する意識
  - ・ 練習をしたい気持ちになるのは、どのような時か（7項目から複数回答、その他自由記述）
  - ・ 練習をしたくない時の理由（12項目から複数回答、その他自由記述）
  - ・ どのようにするとピアノと向き合えるようになるか（11項目から複数回答、その他自由記述）
  - ・ 上記が改善されたら、ピアノの練習をするか（4項目から選択、その他自由記述）
  - ・ 上記について、なぜそのように思ったか（自由記述）

## 4 調査結果および考察

### 4.1 学生が目指す職種に対する意識

学生の本学科への入学意思について、75%以上が自分の意思であったとの回答を得た(図1)。また、本学入学時と2011年7月現在の取得希望免許については、以下のとおりである(図2)。

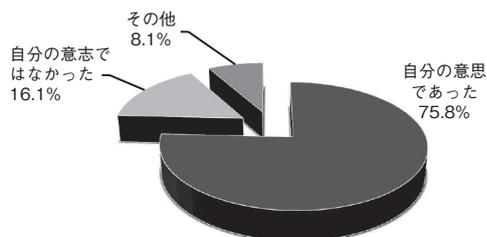


図1 本学科への入学意思

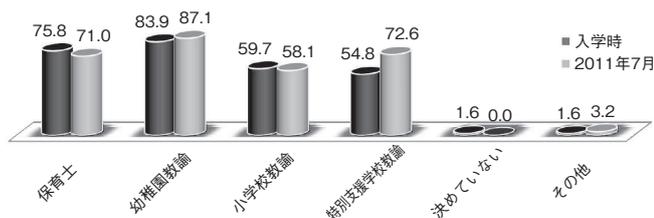


図2 本学入学時と現在の取得希望免許の推移 (%) (複数回答)

取得希望免許について入学時と現在を比較すると、特別支援学校教諭の志望者が統計的に有意に増加している。これは、2年次前期より行われる介護等実習を経て、学生の関心が高まったものと思われる。保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の志望者について有意差は認められなかった。

また、個々の学生が目指す職種におけるピアノ実技の必要性認識度（保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭の資格・免許取得希望者対象）については、必要と答えた学生が96.8%であった(図3)。その理由についても、就職試験や現場で必要と感じている学生がともに80%を超え、加えてこどもの学習に活用したいと考えている学生も過半数を超えていた(図4)。この結果からは、

自身の興味より、根底に強い職業意識があることが読み取れる。

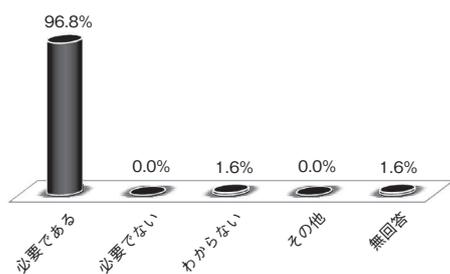


図3 ピアノ実技の必要性認識度

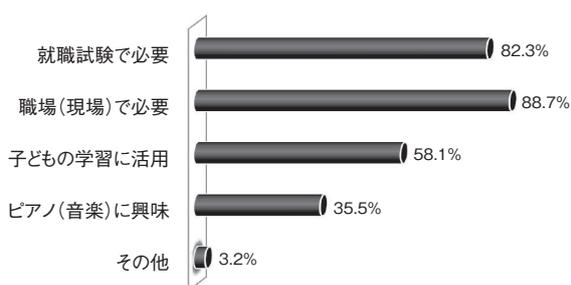


図4 ピアノ実技が必要な理由 (複数回答)

## 4.2 ピアノ学習の実態

大学入学前のピアノレッスン経験の有無については、表2のような回答を得た。また、ピアノの学習環境については、表3のとおりである。

表2 大学入学前のピアノレッスン経験の有無、及び経験年数

ピアノ「経験あり」					ピアノ「経験なし」
34 (54.8)					28 (45.2)
1年未満	1～3年未満	3～5年	それ以上	計	
4 (11.8)	7 (20.6)	2 (5.8)	21 (61.8)	34 (100)	

n=62 人 (%)

表3 ピアノの学習環境

学習環境	人数 (割合)
個人レッスン	26 (76.5)
音楽教室	15 (44.1)
学校	0 (0.0)
その他	1 (2.9)

n=34 人 (%)  
(複数回答)

この調査では、半数以上の学生がピアノ経験者であると答えている。加えて、経験者の60%以上が5年以上にわたりレッスンを受けていたことがわかった。授業を通して感じられた学生の音楽知識の量を考えると、予想以上に高い数字であった。このことから、長く楽器に親しみながら、音楽知識の蓄積に関してはかなりの個人差があることが推測される。特に個人レッスンの場合は、こどもや親の希望、こどもの音楽的資質にのっとった指導がなされることも多い。

また、ピアノ経験者34名のピアノの学習環境は、圧倒的に個人レッスンが多く、次いで音楽教室となっていた。

大学入学後の練習の実態についての設問(5)～(12)の結果においては、現2年生の1年次と2年次の実態を比較するため、表4～表7にまとめた。また、それぞれの質問項目において、大学入学前のピアノの「経験あり」・「経験なし」毎に、同表(網掛部分)に集計した。

表4は、ピアノの練習量についての結果である。

表4 ピアノの練習量

	よく練習した	少し練習した	したりしなかったり	あまり練習しない	ほとんど練習しない	その他	
1年次	15 (24.2)	29 (46.8)	12 (19.4)	4 (6.5)	1 (1.6)	1 (1.6)	62 (100)
経験あり	7 (20.6)	21 (61.7)	2 (5.9)	4 (11.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	34 (100)
経験なし	8 (28.6)	8 (28.6)	10 (35.6)	0 (0.0)	1 (3.6)	1 (3.6)	28 (100)
2年次	2 (3.2)	18 (29.0)	19 (30.6)	15 (24.2)	7 (11.3)	1 (1.6)	62 (100)
経験あり	1 (2.9)	12 (35.3)	10 (29.4)	9 (26.5)	2 (5.9)	0 (0.0)	34 (100)
経験なし	1 (3.6)	6 (21.4)	9 (32.1)	6 (21.4)	5 (17.9)	1 (3.6)	28 (100)

n=62 人 (%)

1年次について、ピアノの「経験あり」と「経験なし」を合わせて見てみると、全体では71.0%がよく練習した・少し練習したと答えている。これを「経験あり」・「経験なし」で見ると、「あり」では82.3%であるのに対し、「なし」では57.2%と低い。同じく2年次について、全体では32.2%がある程度の練習をしており、「あり」では38.2%、「なし」では25.0%となっている。これに対して練習をあまりしなかった・ほとんどしなかった学生は、1年次から2年次へ全体では8.1%から35.5%、「あり」では11.8%から32.4%、「なし」では3.6%から39.3%と、高い比率で推移したことが判明した。

次いで、ピアノ練習の頻度について見ると（表5）、全体では1年次が週に2～3日、2年次が週に1度という回答が半数近くあった。週に1日以上練習している学生を1年次から2年次へ比較すると、「経験あり」では94.1%から85.3%とわずかな減少であるのに対し、「経験なし」では78.6%から46.4%と激減している。これは、ピアノレッスン形態が取られていない場合の初心者が、自らピアノを学習することの難しさを如実に物語っている。

表5 ピアノ練習の頻度 n=62 人 (%)

	毎日	週に4～5日	週に2～3日	週に1日	授業時	ほとんどしない	その他	
1年次	0 (0.0)	10 (16.1)	27 (43.5)	17 (27.4)	4 (6.5)	2 (3.2)	2 (3.2)	62 (100)
経験あり	0 (0.0)	5 (14.7)	17 (50.0)	10 (29.4)	2 (5.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	34 (100)
経験なし	0 (0.0)	5 (17.9)	10 (35.7)	7 (25.0)	2 (7.1)	2 (7.1)	2 (7.1)	28 (100)
2年次	0 (0.0)	1 (1.6)	16 (25.8)	25 (40.3)	11 (17.7)	8 (12.9)	1 (1.6)	62 (100)
経験あり	0 (0.0)	1 (2.9)	9 (26.5)	19 (55.9)	3 (8.8)	2 (5.9)	0 (0.0)	34 (100)
経験なし	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (25.0)	6 (21.4)	8 (28.6)	6 (21.4)	1 (3.6)	28 (100)

更に、一日のピアノ練習時間については（表6）、1時間程度からそれ以上は全体では1年次が43.6%、2年次が25.8%という結果であった。「経験あり」・「経験なし」で2年間を比較すると、「あり」は1年次35.3%、2年次は23.5%であるのに対して、「なし」では1年次53.5%、2年次28.3%と、いずれも「経験なし」の学生の方がピアノに触れている時間が長いことがわかる。これは、ピアノ初心者が読譜や両手で弾くことに不慣れで、経験者と比較するとより多くの時間を要することが現れていると考えられる。

表6 一日のピアノ練習時間 n=62 人 (%)

	10分未満	10～20分未満	20～30分未満	30～45分未満	1時間程度	1時間以上	無回答	
1年次	2 (3.2)	0 (0.0)	19 (30.6)	14 (22.6)	20 (32.3)	7 (11.3)	0 (0.0)	62 (100)
経験あり	0 (0.0)	0 (0.0)	14 (41.2)	8 (23.5)	11 (32.4)	1 (2.9)	0 (0.0)	34 (100)
経験なし	2 (7.1)	0 (0.0)	5 (17.6)	6 (21.4)	9 (32.1)	6 (21.4)	0 (0.0)	28 (100)
2年次	5 (8.1)	8 (12.9)	16 (25.8)	14 (6.5)	10 (16.1)	6 (9.7)	3 (4.8)	62 (100)
経験あり	0 (0.0)	7 (20.6)	9 (26.5)	10 (29.4)	5 (14.7)	3 (8.8)	0 (0.0)	34 (100)
経験なし	5 (17.6)	1 (3.6)	7 (25.5)	4 (14.3)	5 (17.6)	3 (10.7)	3 (10.7)	28 (100)

学生によるピアノ練習量の満足度についての自己評価は、表7のような結果になった。不満・やや不満と答えた学生は、全体では1年次に53.2%、2年次では67.6%と増加した。「経験あり」・「経験なし」で見ると、1年次から2年次へ「あり」では52.9%から67.7%、「なし」では53.6%から67.8%と、いずれもわずかな増加が見られる。これに対して満足・やや満足と答えた学生は、全体では1年次に12.9%、2年次に6.4%と減少した。また、「あり」・「なし」で見ても、1年次から2年次へ「あり」で8.8%

から 5.8%, 「なし」で 17.9% から 7.1% と減少している。これは、過去に練習を充分にしていた時の自分と無意識的に比較をした結果、満足度が低下したものと推察される。

表 7 ピアノ練習量の満足度

n=62 人 (%)

	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満	無回答	
1 年次	1 ( 1.6)	7 (11.3)	21 (33.8)	19 (30.6)	14 (22.6)	0 ( 0.0)	62 (100)
経験あり	0 ( 0.0)	3 ( 8.8)	13 (38.2)	12 (35.3)	6 (17.6)	0 ( 0.0)	34 (100)
経験なし	1 ( 3.6)	4 (14.3)	8 (28.6)	7 (25.0)	8 (28.6)	0 ( 0.0)	28 (100)
2 年次	1 ( 1.6)	3 ( 4.8)	14 (22.6)	17 (27.4)	25 (40.3)	2 ( 3.2)	62 (100)
経験あり	1 ( 2.9)	1 ( 2.9)	9 (26.5)	11 (32.4)	12 (35.3)	0 ( 0.0)	34 (100)
経験なし	0 ( 0.0)	2 ( 7.1)	5 (17.9)	6 (21.4)	13 (46.4)	2 ( 7.1)	28 (100)

ピアノ学習の実態調査の最後に、ピアノ実技の到達度の学生による自己評価の回答を得た (表 8)。

表 8 ピアノ実技の到達度 人 (%)

上達した	1 ( 1.6)
少し上達した	20 (32.3)
あまり上達していない	27 (43.5)
下手になった	8 (12.9)
その他	5 ( 8.1)
無回答	1 ( 1.6)

n=62

上達した・少し上達したと感じている学生が 33.9% に対し、上達していない・下手になったと感じている学生は 56.4% と半数を超えた。これまでの調査結果から、1 年次と比較して明らかに練習量が減っており、その結果、演奏技術の向上が見られないことを学生自身も自覚していることが明らかになった。

#### 4.3 ピアノ練習に対する意識

ピアノ練習に対する意識については、あらかじめ用意された項目から、学生の自由選択 (複数回答) で回答を求めた。「ピアノの練習をしたくなるのは、どのような時か」(表 9) に対しては、「経験あり」で好きな曲をマスターしたいという回答が 70.6% と多く、課題、ピアノを弾く役割が続いた。「経験なし」では、上達を自覚が 64.3%、次いで好きな曲をマスターと回答している。また、「あり」・「なし」とともに褒められることだけで練習につながらないという結果は、指導者からの、あるいは学習者相互の褒め方の工夫の余地があるといえよう。自由記述においては「やる気がしない」、「教採や将来を考えた時」、「実習の話題が出た時」の他、「歌いたい・弾きたい時」、「経験者に負けたくない」などの記述が見られた。

表 9 ピアノの練習をしたくなるのは、どのような時か 人 (%)

	経験あり n=34	経験なし n=28	全体 n=62
① 好きな曲をマスターしたい	24 (70.6)	15 (53.6)	39 (62.9)
② 自分の好きな曲が課題	13 (38.2)	10 (35.7)	23 (37.1)
③ 課題が出された	15 (44.1)	8 (28.6)	23 (37.1)
④ 誰かに褒められた	5 (14.7)	4 (14.3)	9 (14.5)
⑤ ピアノを弾く役割等を持った	15 (44.1)	2 ( 7.1)	17 (27.4)
⑥ 上達したのを自覚	10 (29.4)	18 (64.3)	28 (45.2)
⑦ ピアノ技術に自信	11 (32.4)	10 (35.7)	21 (33.9)
⑧ その他	6 (17.6)	5 (17.9)	11 (17.7)

(複数回答)

表 10 ピアノの練習をしたくない時の理由 人 (%)

	経験あり n=34	経験なし n=28	全体 n=62
① 音楽が嫌い	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
② ピアノが嫌い	0 ( 0.0)	2 ( 7.1)	2 ( 3.2)
③ 楽譜が読めない	4 (11.8)	10 (35.7)	14 (22.6)
④ 指使いがわからない	3 ( 8.8)	13 (46.4)	16 (25.8)
⑤ 音楽に関して失敗体験	1 ( 2.9)	1 ( 3.6)	2 ( 3.2)
⑥ 必要性を感じない	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
⑦ 人と比べてしまう	6 (17.6)	5 (17.9)	11 (17.7)
⑧ できない(わからない)ものから逃避	7 (20.6)	8 (28.6)	15 (24.2)
⑨ 自信がない	4 (11.8)	10 (35.7)	14 (22.6)
⑩ 練習環境が整っていない	4 (11.8)	2 ( 7.1)	6 ( 9.7)
⑪ 時間がない	20 (58.8)	20 (71.4)	40 (64.5)
⑫ 全てに気が進まない	8 (23.5)	4 (14.3)	12 (19.4)
⑬ その他	4 (11.8)	4 (14.3)	8 (12.9)

(複数回答)

次に、練習したくない時を尋ねると（表 10）、「経験あり」・「経験なし」ともに時間がないという理由が圧倒的に多い。また、「あり」では全てに気が進まない、逃避や人との比較、「なし」では指使いの問題が大きく、次いで読譜や自信がないことを挙げている。全体で見ても、時間がない理由の他に、読譜や指使いがわからなくて逃避し、自信が育たない現状が推察される。自由記述で、「飽きる」、「他事に時間を使う」、「すぐに心が折れる」、「難しい」の他、「気分が乗らない」（2名）があった。

どのようにしたらピアノに向き合えるかについての学生の回答は、表 11 にまとめられている。全体の中で最も顕著な事項は、ピアノに対する意識の向上と目標の再確認であり、これは自らの心の問題を認識しているといえる。また、実技テストや授業がレッスン形態であること、誰かと一緒に学ぶことを望んでいる学生の比率も大きい。この結果からは、直接成績に関する実技テストであれば、多少の困難でもやり遂げようとする学生の傾向も読み取れる。また、ピアノの練習が、自己と向き合う孤独な一面があるために、学生はそれを好ましいと感じていないことが推察される。自由記述では、「誰かのために弾こうと思った時」の他、「時間ができたら」（2名）などがあった。

最後に、表 11 の内容が改善されればピアノの練習をするかどうかを尋ねた（図 5）。その結果、練習しないが 0.0%であったのに対して、よく練習するが 64.5%、少し練習するが 30.6%であった。自由記述では、「自分が変わらないと練習しないと思う」、「練習するというより、もっと弾きたいと思えるようになると思う」の記述があった。

表 11 どのようにしたら、今よりピアノと向き合えるか 人 (%)

	経験あり n=34	経験なし n=28	全 体 n=62
① ピアノに対する意識の向上	21 (61.8)	10 (35.7)	31 (50.0)
② 目標の再確認	17 (50.0)	10 (35.7)	27 (43.5)
③ 進路が定まった	7 (20.6)	5 (17.9)	12 (19.4)
④ 楽譜が読める	7 (20.6)	10 (35.7)	17 (27.4)
⑤ 指使いが考えられる	1 ( 2.9)	10 (35.7)	11 (17.7)
⑥ 成功体験をする	9 (26.5)	10 (35.7)	19 (30.6)
⑦ 理解を深める努力	9 (26.5)	9 (32.1)	18 (29.0)
⑧ 授業毎の練習課題	7 (20.6)	5 (17.9)	12 (19.4)
⑨ 実技テスト	13 (38.2)	8 (28.6)	21 (33.9)
⑩ ピアノレッスン形態の授業	11 (32.4)	9 (32.1)	20 (32.3)
⑪ 誰かと一緒に練習	10 (29.4)	10 (35.7)	20 (32.3)
⑫ その他	5 (14.7)	4 (14.3)	8 (12.9)

(複数回答)

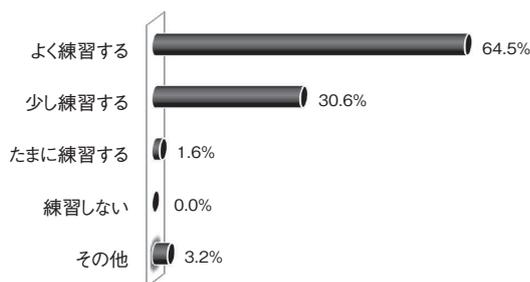


図5 意識向上や学習環境改善後、練習すると思うか

## 5 研究のまとめと今後の課題

これらの結果から明らかになったことについて、学生のピアノ学習におけるつまずきの多くは、履修科目数の多さやアルバイトなどによるピアノ練習の時間確保の困難、音楽の基礎知識の乏しさから派生する読譜や、ピアノの演奏経験不足による指使いの工夫の困難などに起因しているものと思われる。その結果、ピアノ学習をつまらないものと感じ、ピアノから逃避し、自信を育む機会さえ自ら遠ざけてしまったのではないだろうか。

保育者・教育者養成校における学生は、技術レベルの違う経験者・初心者が、同じカリキュラムの中で学習しなければならない。まして音楽の基礎知識や感性においては、これまでの音楽経験の有無や内容によって大きく異なっている。これらの学生の実態に反して、現場からはあるレベル以上の実

践力が求められている。加えて、授業時数や指導者数の少なさなど養成校が抱える学習環境の問題も存在する。養成校における学生と学習環境の現状を把握した上で指導者が最初になすべきことは、学生のピアノ学習の妨げとなっている点の改善であると考えられる。その際には、限られた時間内の指導で陥りがちな“ピアノ技術指導”に偏らない、学生に対する精神的な支えをも含めた“ピアノ学習支援”が重要である。

筆者の経験上、ピアノを弾くことを“遊び”の一つとして意識させることができれば、学習者が自ら進んでピアノと向き合うことは難しいことではない。しかし、ピアノ学習において特徴的なことは、学習者の身体的機能や精神的性質、ある種の運動能力の得手・不得手などが一人ひとり異なる点である。指使いを例に挙げると、同じ曲でも弾き手が違えば、また指導者が変われば、異なった指使いになることも稀ではない。しかしながら、学習者が指使いのみならず、自身の練習方法やその目的を見出すことは、ある程度のピアノ学習経験を積まなければ容易なことではない。必要に迫られて行うピアノ学習であればなおさら、わずかな練習で進歩が感じられない多くの学習者は、不安を抱え、ピアノに向かうことを徐々に臆するようになる。そのような状況に陥らないよう、指導者は学習者の抱える悩みや不安に配慮し、学習者が前向きな気持ちになるよう支援することが大切である。すなわち、それは、学習者の学習意欲を高め、苦手意識を取り除き、効率よくピアノ学習の楽しみへとつなげていく行為といえよう。

今回の調査では、特に初心者が一人で練習を持続させることの難しさと、「楽譜が読めない」、「指使いがわからない」などの訴えが多かった。だが、これらのピアノ学習の妨げとなっている困難を克服すれば「よく練習する」ようになるだろうと学生自身が答えていることから、読譜や指使いなど、ピアノの基礎力を高めることは急務である。同時に、指導者は、常に広い視野を持ち、学習者の成長をあらゆる角度から促す、学習支援のための指導力の向上も目指さなければならないといえる。

ダルクローズは、「真の教育者は、同時に、心理学者、生理学者、芸術家でもあらねばならない。<sup>15)</sup>」と述べている。また、音楽教育についてマーセルは、「教育者の責任は、教育の全過程を通して最善の教育的影響を用意し、学習者のすべてが、音楽の道を迷わずに進んで行けるように、また、誰もが音楽のすばらしい贈物が受けられるように、助け導くことである。<sup>16)</sup>」と主張している。

こどもも大人も、楽しいことには時間を忘れ興じるものである。ピアノ実技においても、ひとたび楽しみを知った者の進歩には目を見張るものがある。保育者・教育者養成における学生も、ピアノを弾くことの楽しみや喜び、達成感を体験できれば、目覚ましい進歩を遂げる可能性を秘めている。しかし、最も大切なことはピアノ技術の良し悪しではなく、純粹に音楽を楽しむ心である。保育者・教育者がこどもに与える影響の大きさを考えると、学生の精神面での成長は特に重要な要素の一つといえよう。

今後は、本論文で取り組んだ学生のピアノ学習支援について検証を続け、更に目には見えない“音”を用いた“遊び”について、授業内容の検討や、効果的な指導方法の研究を深めていく所存である。

## 注

<sup>注</sup> 本論文では、保育者を保育士、教育者を幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭を指すものとする。

## 文献

- 1) 寺西春雄：やわらかな音楽教育（初版）. 8, 東京都, 春秋社, 1993.
- 2) Johan Huizinga : Homo Ludens. 1938. 高橋英夫訳：ホモ・ルーデンス. 334, 中央公論新社, 1973.
- 3) 同上. 102,
- 4) 柳生力：自分のためにうたがあるとき —音楽教育論集—（初版）. 22-23, 東京都, 音楽之友社, 1986.
- 5) 羽根田真弓：保育者養成校の課題と問題点 —質問紙調査結果の分析から—. 鳥取短期大学研究紀要 第50 記念号：60, 2004.
- 6) 阪本朋子, 小西淳子, 田代恭也, 村崎愛, 西川眞美：学生の「ピアノ苦手意識」克服への取り組み. 芦屋女子短期大学研究紀要：48, 2010.
- 7) 松永洋介：小学校教員養成におけるピアノ初心者に対する指導メソッドの開発（I）—スリー・コードを中心にしたコード伴奏に基づくピアノ指導の有効性について—. 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究 第5 巻：29, 2003.
- 8) 本間英子：小学校教員養成課程におけるピアノ指導 I—初歩者の問題（1）—. 昭和女子大学 近代文化研究所『学苑』：80, 1983.
- 9) 阪本朋子, 小西淳子, 田代恭也, 村崎愛, 西川眞美：同前. 48,
- 10) 文部科学省：小学校学習指導要領（初版）. 75-82, 東京都, 東京書籍, 2008.
- 11) 泉谷千晶：初心者のためのピアノ・グループ指導の研究 ～保育者養成課程における実技のカリキュラムの工夫～. 青森明の星短期大学紀要 第32 号：25, 2007.
- 12) 中山由里：ピアノ教育の導入期における授業についての一考察 —ピアノ学習初心者への講座を通して—. 九州女子大学紀要 第44 巻3 号：67, 2008.
- 13) 中地雅之, 小笠原勇美, 林芳輝, 今関由紀子, 光井安子, 佐々木正利, 高橋良学：教員養成学科における「教科専門科目・音楽」改善の試み —小学校教員養成課程必修科目に関する97 年度実践報告—. 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 第8 号：31, 1998.
- 14) 降矢美彌子：「小専音楽」の現状と改善の課題. 福島大学教育実践研究紀要 第17 号 別冊その1：14, 1990.
- 15) Émile Jaques-Dalcroze : E RYTHME, LA MUSIQUE ET L'ÉDUCATION. 1965. 板野平監修, 山本昌男訳：リズムと音楽と教育. 127, 全音楽譜出版, 2003.
- 16) James L. Mursell : "Growth Process in Musical Education." Basic Concepts in Music Education. 1958. 美田節子訳：音楽的成長のための教育. 301, 音楽之友社, 1971.

別紙

保育内容V 音楽リズム1 ピアノ実技に関する調査

2011.07

\* 今後の私の授業研究の参考にさせて頂くためのアンケートです。成績には全く関係ありません \*

2年 組	学籍番号	氏名
------	------	----

(1) 本学科に入学したのは、あなた自身の意思でしたか？

- ①自分の意思であった ②自分の意志ではなかった ③その他

(2) あなたが入学時に取得を目指していた免許は？(複数回答可)

- ①保育士 ②幼稚園教諭 ③小学校教諭 ④特別支援学校教諭 ⑤決めていなかった ⑥その他

(3) あなたが現在、取得を目指している免許は？(複数回答可)

①～④とお答えの方は、以下の設問へ

①保育士 ②幼稚園教諭 ③小学校教諭 ④特別支援学校教諭 ⑤決めていない・迷っている ⑥その他	➔	①その職業について、ピアノ実技は必要ですか？ ①必要 ②必要ない ③わからない・知らない ④その他 ②なぜピアノ実技が必要だと考えましたか？(複数回答可) ①就職試験で必要である ②職場(現場)で必要である ③子どもたちの学習に音楽を活用したい ④ピアノ(音楽)に関して興味を持っている ⑤その他 ( )
--	---	---

ピアノ実技についてお答えください。

(4) 大学入学までに、ピアノを習ったことがありますか？

①とお答えの方は、以下の設問へ

①ある ②ない	➔	①それは、どのくらいの期間ですか？ ①1年未満 ②1～3年未満 ③3～5年 ④それ以上 ②どこで習っていましたか？(複数回答可) ①ピアノの個人レッスン ②音楽教室 ③学校 ④その他 ( )
------------	---	---

(5) 大学1年生の時、あなたはピアノの練習をどの程度しましたか？

- ①よく練習した ②少し練習した ③したりしなかったりであった ④あまり練習していない  
⑤ほとんど練習しなかった ⑥その他

(6) (5) について、練習の頻度はおよそどのくらいでしたか？

①毎日 ②週に4～5日 ③週に2～3日 ④週に1日 ⑤授業時のみ ⑥ほとんどしなかった ⑦その他

(7) (6) について、一日の練習時間はおよそどのくらいでしたか？

①10分未満 ②10～20分未満 ③20～30分未満 ④30～45分未満 ⑤1時間程度 ⑥1時間以上

(8) (5)～(7) について、ご自身の練習量については満足していますか？

①満足している ②やや満足している ③どちらでもない ④やや不満である ⑤不満である

(9) 大学2年生の時、あなたはピアノの練習をどの程度しましたか？

①よく練習した ②少し練習した ③したりしなかったりであった ④あまり練習していない  
⑤ほとんど練習しなかった ⑥その他

(10) (9) について、練習の頻度はおよそどのくらいでしたか？

①毎日 ②週に4～5日 ③週に2～3日 ④週に1日 ⑤授業時のみ ⑥ほとんどしなかった ⑦その他

(11) (10) について、一日の練習時間はおよそどのくらいでしたか？

①10分未満 ②10～20分未満 ③20～30分未満 ④30～45分未満 ⑤1時間程度 ⑥1時間以上

(12) (9)～(11) について、ご自身の練習量については満足していますか？

①満足している ②やや満足している ③どちらでもない ④やや不満である ⑤不満である

(13) (12) の結果、ピアノ実技の到達度については、どのように感じていますか？

①ずい分上達した ②少し上達した ③あまり上達していない ④昨年より下手になった  
⑤その他 ( )

(14) あなたがピアノの練習をしたい気持ちになるのは、どのような時ですか？(複数回答可)

①自分の好きな曲をマスターしたいと思った時 ②自分の好きな曲が課題の時  
③自分の好き嫌いに関わらず、課題が出された時 ④誰かに褒められた時  
⑤授業以外でピアノを弾く役割等を持った時 ⑥前より上達したのを自覚した時  
⑦ピアノの技術に自信ができてきた時  
⑧その他 ( )

(15) ピアノの練習をしたくない時の理由として近いものを選んでください。(複数回答可)

①音楽が嫌い ②ピアノが嫌い ③楽譜が読めない ④指使いがわからない ⑤音楽に関して失敗体験がある  
⑥ピアノに必要性を感じない ⑦人と自分を比べてしまう ⑧できない(わからない)ものからは逃げ出したい  
⑨自信がない ⑩練習環境が整っていない ⑪時間がない ⑫ピアノに限らず、何となく全てに気が進まない  
⑬その他 ( )

(16) どのようにしたら、今よりピアノと向き合えるようになると思いますか？ (複数回答可)

- ①自分のピアノに対する意識の向上 ②保育、あるいは初等教育の専門家になるのだという目標の再確認  
③進路がしっかり定まった時 ④楽譜が読めるようになった時 ⑤指使いが自分で考えられるようになった時  
⑥やればできるんだという成功体験をする ⑦わからないことを調べたり聞くなど理解を深める努力をする  
⑧授業毎に練習課題を出してもらう ⑨実技のテストがある ⑩授業がピアノレッスンの形態である  
⑪誰かと一緒に練習する  
⑫その他 ( )

(17) (16) が改善されたら、あなたは練習すると思いますか？

- ①よく練習する ②少し練習する ③たまに練習する ④練習しない  
⑤その他 ( )

(18) (17) について、なぜそのように思いましたか？ 自由にお書きください。

ご協力をありがとうございました

# **Needs of Learning Support in Piano Instruction : a Survey of Prospective Nursery School and Elementary School Teachers**

ONO Yoshie

**Abstract:** The institutions that have programs for prospective nursery school and elementary school teachers have conventionally provided their students with piano training as a primary means of helping them improve their music skills as required in their prospective workplaces. The piano training at these institutions, however, has various problems that have yet to be solved. To better understand what kind of piano instruction is actually provided for students at these institutions and how the students feel about it, a survey was conducted among 66 students learning nursery school and elementary school education at the author's university. The results showed that students are failing to learn the piano because they have trouble setting aside practice time, learning to read music, and finding effective ways to use their fingers properly. It is necessary for instructors to help their students avoid failure and feel easy about playing the piano by helping them consider piano playing as a kind of 'play'. The survey results suggest that whether they are experienced piano players or novices, all students should be provided with support that not only addresses their technical needs but also their emotional needs in piano learning.